

作家の生活

横光利一

青空文庫

優れた作品を書く方法の一つとして、一日に一度は是非自分がその日のうちに死ぬと思うこと、とジットドはいつたということであるが、一日に一度ではなくとも、三日に一度は私たちでもそのように思う癖がある。殊に子供を持つようになつてからはなおさらそれが激しくなつた。親としての作家と、作家としての作家と、区別はないようであるけれども、駄作を承認する襟度に一層の自信を持つようになつたのは、親としての作家が混合して来た結果である場合によることが多いと思われる。人間が行動するとき、子のあるものと子のないものとの行為や精神には、非常な相違がある。この平凡な確実なことは、子のないときには理解ができるても洞察の度合においてはるかに深度が違つてくる。この深度は作家の作品に影響しないはずがない。宇野浩二氏の『子の来歴』に一番打たれた人々も子のない人に多いのは、観賞に際してもあまりに曇りがなかつたからに違いない。

よく作家が寄ると、最後には、子供を不良少年にし、餓えさせてしまつても、まだ純創作をつづけなければならぬかどうかという問題へ落ちていく。ここへ来ると、皆だれでも黙つてしまつて問題をそらしてしまつのが習慣であるが、この黙るところに、もつとものつぴきのならぬ難題が横たわつていると見てもよからう。

私は創作をするということは、作家の本業だとは思わない。作家の本業というのは、日々の生活に際して、態度を定めていくということだ。この態度から生れて来る創作というものは、その結果からにちがいはないとしても、創作をするという動作は、たしかに本業ではなくて副業である。創作することが副業であるなら、滅びようと滅びまいと、何かそこには覺悟が自ら生じていくにちがいないのである。私は自分の作品が自分の窮極をめざして作っていると思ったことは、かつて一度もまだなかつた。私はその場所にいる自分の段階で、出来うるかぎり最善の努力を払えば良いと思っている。次ぎの日には、次ぎの日の段階が必ずなければ、時間というものは何のためのものでもない。

私は作品を書く場合には、一つ進歩した作品を書けば、必ず一つは前へ戻つて退歩した作品を書いてみる習慣をとつてゐる。そうでなければ次ぎの進歩が分りかねるからであるが、昨年の夏、総持寺の管長の秋野孝道氏の禅の講話というのをふと見ていると、向上といふことには進歩と退歩の二つがあつて、進歩することだけでは向上にはならず、退歩を半面でしていなければ真の向上とはいがたいという所に接し、私は自分の考えのあながち独断でなかつたことに喜びを感じたことがあつた。このようなことは、禅機に達することだとは思はないが、カルビン派のように、知識で信仰にはいろいろとしなければならぬ近

代作家の生活においては、孝道氏の考え方は迷いを退けるには何よりの近道ではないかと思う。

他人のことは私は知らないが自分一人では、私は物事をどちらかというと観察しない方である。自然に眼にふれ耳にはいつてくることの方を大切にしたいと思っている。観察をすると有効な場合はあるが、観察したことのために相手が変化をしてしまうので、もう自然な姿は見られない。殊に何ものよりも一番大切な人の顔がそうである。誰からも尊敬されているような人物よりも、誰からも軽蔑されている人物の方が正確に人をよく見ていることの多いのも、露骨に人はそのものの前で自分をだましてしまうからにちがいない。このようなところから考えても、ドストエフスキイが伯爵であるトルストイの作を評して、庶民というものをトルストイは知つていないと片づけたのも、トルストイにとつては致命的な痛さだつたにちがいない。貴族のことを好んで書いたバルザックも誰か無名の貴族のものから、彼は貴族の生活というものを知つていないとやられている。

しかし、何といつても、作家も人間である以上は、一人で一切の生活を通過するということは不可能なことであるから、何事をも正確に生き生きと書き得られることは所詮それは夢想に同じであるが、私たちにしても作者の顔や過去を知つているときは、もう

その作家の作物に対して殆ど大部分正確な批判は下せていない。殊に、作家の顔がその作物を読む場合に浮び出しては、おしまいである。田舎にいてまだ人に知られていない作者で、よく文壇を動かすことのあるとき、都会へ出て来ても依然として動かしつづけているとしたら、よほどまれなその者は人物だと見てもよいと思う。

しかし結局、身辺小説といわれているものに優れた作品の多いことは事実であり、またしたがつて当然でもあるが、私はたとい愚作であろうとかまわないから、出来得る限り身辺小説は書きたくないつもりである。理由といつては特に目立つた何ものもない。ただ一番困難なことを私はやりたくてならぬ性質なのである。

もちろん、身辺小説も困難なことにおいてはそう違わないと思うが、人それぞれの性質によつて困難の対象は違うものとしなければならぬなら、私にとつての困難はやはり身辺小説だとは思えないでの、こつこつやつているうちに幾らかはなろうと思つてはいる。決心したことはまずやつて見なければ、この道にはいつてしまつた以上は、もう仕方がない。

しかし、幸いなことには私は、作品の上で成功しようと思う野望は他人よりは少い。いやむしろ、そんなものは希としては持つてゐるだけで、成功などということはあらうとは思えないのである。これは前にも書いたことで今始めて書くことではないが、作品の上で

は、成功というような結構なものはないはしないと思つてゐる。書く場合に書くことを頭に浮べて思うとき、いつも、これは自分にはどうしても書けるものではないと思う。しかし、もう一度考えて見ると、自分以外のものでもどんな大天才を昔から掘り起して来たところが、やはり書けない部分がそこにひそんでいることを感づいてくる。そうなると、作家というものはもう慎重な態度はとつていられるものではなくなつてしまふ。

必ずそのときには悪魔か神かに突きあたつてぶらぶらしてしまふより方法はないが、何かかけ声のようなものをかけ、一飛びに無理をそのまま捻ぢ倒してしまつてふうふうとう。つまりそのときは明らかに自分が負かされてしまつているのだ。それを明瞭に感じはするが、これもいかんとも私にはなし難い。理論はそういうときに、口惜しいけれども飛び出してしまう。書くときには疲れないが書けないときにはひどく疲れてへとへとなるのも、このときである。

これは作家の生活を中心とした見方の一例にまで書くのであるが、『春琴抄』という谷崎氏の作品を読むときでも、私も人々のいう「とく立派な作品だと一応は感心したもの」、やはりどうしても成功に対して誤魔化しがあるように思えてならぬのである。題材の持ち得る一番困難なところが一つも書いてはなくて、どうすれば成功するかという苦心の方が

目立つてきて、完璧になつてゐる。いいかえれば一番に失敗をしているのだ。佐助の眼を突く心理を少しも書かずに、あの作を救おうという大望の前で、作者の顔はこの誤魔化しをどうすれば通り抜けられるかと一身に考えふけつてゐるところが見えてくるのである。佐藤春夫氏は極力作者に代つて弁解されたが、あの氏の弁明は要するに弁明であつて、自然是そんなことを赦すはずがないと思う。次ぎの『顔世』はあのような失敗の作である。もし佐藤氏の弁明が弁明でないなら、自作の顔世があのよくなおどけた失敗はするものではない。もつと理由のある失敗をするはずである。一作は次ぎの一作とは全く独立はしているとしても、作者の意識というものは左様に都合よく独立し得られるものだと私は思えない。『春琴抄』における眼を突く時間の早さについてうんぬんしたのも、私にはここに意見があつたのである。

ついでに宇野浩二氏の『子の来歴』についても一言生活としての例を挙げるとすると、この作も私は人々のいう如く感心をし、見上げた作品だと思ったが、しかし、この作品には、もつとも大切な親心のびくびくした感情というものは少しも出ていないようと思われるるのである。天界にはいつたがためにびくつかないのなら、リアリズムの精神の深さというものは、いつでも天界へはいれる用意だけはしているものである。

宇野浩二氏は親心のびくつく大切な心理を圧えることに用心をされたのではなく、不恰好にそれをださないことに用心をされたのであって、作者と作中人物とがここまで素早く身を躲して、眼にもとまらぬ早さである。この早さが私には受けとり難い。もつとはるかにのろのろすべきところであるにもかかわらず、それをすり変えた巧みさは作者の意識の悠々たる落ちつきとは度を違えて周章ている。

しかし、このようなことは、作品の欠点とはならず、すべて作者の制作中の意識作用から眺めた作品の見方で通用するものとは私も思っていない。作品批評をする場合には、もちろん、作品が中心であるのだから、こんなことはどうでもよさそうなものであるが、作家の生活というところに中心をおけばそのような箇所から見ることも、これもどうしようもないことである。作家生活をしているうえは、その生活から自然に物事を眺めるようになつてくるので、ここから絶えず抜け出る工夫は躍起となつてしているにもかかわらず、それが手つ取り早く出来るものではない。

私小説はそれを克服して後始めて本格小説となるという河上徹太郎、小林秀雄両氏などの説も今の作家にとつては何よりの警告であつたと思うが、そのようになるための方法としてでも私は制作をするということが本業ではなく副業であると見る見方をとらねばなら

ぬと思つてゐる。そのため、私一個人としては、先ずそこへ行きつくまでは私の作が愚作であろうが傑作であろうが少しも変りはしない。やはり同じ失敗の作で、成功というような見事な不自然なことは到底及びもつかない夢だと思う。もし傑作が出来ればまぐれ当りだ。私が何をしていくかという質問を出された前では、ただ自分は爆けていき、はみ出して行きたいと望んでいると答えるより、今のところ答弁は見つかりそうもない。

（一九三四年四月）

青空文庫情報

底本：「世界教養全集 別巻1 日本隨筆・隨想集」平凡社

1962（昭和37）年11月20日初版発行

1963（昭和38）年8月15日再版

初出：初出誌不明

1934（昭和9）年4月

入力：sogo

校正：noriko saito

2010年5月20日作成

2011年1月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作成されました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

作家の生活

横光利一

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>